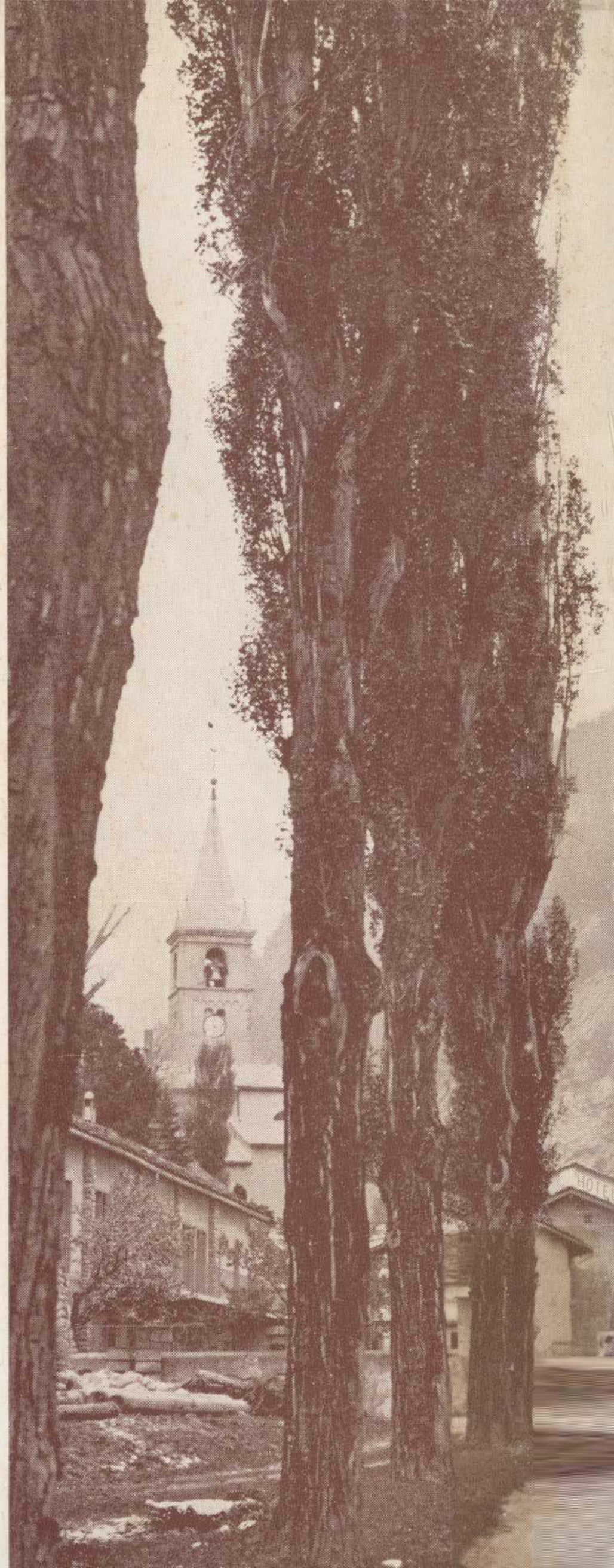


欧米名著邦訳(明治)集

— 文献資料集 —

小田村寅二郎編



岡文研叢書
No. 10

社団法人 国民文化研究会

「日本思想の系譜」の「外編」

欧米名著邦訳（明治）集

小田村寅二郎編

——文献資料集——

編者略歴

- 一、大正三年東京都新宿区(旧四谷区)に生まれる、家系は山口県萩市
- 一、学習院初等科、東京府立一中、第一高等学校を経て、東京帝国大学法学部政治学科を中退
- 一、現職、亜細亜大学講師、社団法人国民文化研究会理事長

「日本思想の系譜」(全五冊)の「外編」
欧米名著邦訳(明治)集——文献資料集

国文研叢書 No.10

昭和四十五年三月二十日 二、〇〇〇部印刷

資料Ⅱ非売品

編者 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七—一〇—一八(柳瀬ビル)

電話(五七二)一五二六—七
振替東京六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一—一—四

は し が き

本書は、さきに刊行した「日本思想の系譜―文献資料集」(全五冊)の「外編」として作成したものである。編集スタッフは、前書と同じ人びとが中心になり、約一カ年を費して、ようやくここに刊行の運びとなったものである。

約十名の編集委員が、数次の会議による討議を経て、それぞれ担当の対象を定め、常時お互いに研究の経過を披瀝^{ひれき}し合いながら、一つ一つの担当対象に、編集委員全員の総力を傾注し合って作業を進めた。それは、さきの「日本思想の系譜」におけるときと同じように、その「外編」である本書の編集においても、十名の人数がいながら、一人の人の作業の如く仕上げ得るように、凝って一丸となった同信的協力の賜物というべきであらう。私が、編者代表として拙名を掲げてはいるものの、この書の成り立ちは、以上のようなものであったことを先ずここに記させていただき、あわせて、編集委員のお名

前を、年令順にご紹介させていただくことにしたい。すなわち、桑原曉一（千歳高、校教諭）、葛西順夫（一橋高、校教諭）、夜久正雄（亜細亜大、教授、養部局長）、浜田収二郎（前共同通信社局長、現本会副理事長）、戸田義雄（国学院大、元、教授、現講師）、関正臣（亜大、学生主事、神官）、梶村昇（亜細亜大、教授）の年配者に加えて、国武忠彦（県立翠嵐、高校教諭）、石井恭子（亜大、卒、本会職員）、山内健生（県立新城、高校教諭）の若い人々と、そして私とであつた。

本書は、その題名「欧米名著邦訳（明治）集——文献資料集」の文字が示すように、明治維新前後に始まる「西欧思想文献の日本語への翻訳」という困難な仕事において、当時のわれわれの先人たちが、どのような辛苦を重ねたのか、その努力の跡を、当時の翻訳文の文字の上に、行間のあいだに、また文章全体にみなぎる気魄の中に、確かに見直してみようではないか、そしてまた、その先人たちの、進取の氣象・不屈の努力・高邁な氣宇が、現代のわれわれ日本人の心の中にも、ひしひしと迫ってくるかも知れない、ということ、作成に取りかかった。

本書に取り上げた邦訳文の原典は、もとより当時の日本人が接し得た範囲内の、欧

米における古今の名著であるが、それらの原典は、今日から振り返ってみても、不思議に、欧米思想文献の中での代表的な作品が多い。このことは、日本人の直観による選択力がすぐれていたためか、それとも、これらの原典を日本に紹介した外国人たちが優秀な人々であったためか、それはわからないが、いずれにせよ、西欧文明に接した初期において、当の日本人が西欧文明を代表するような原典に、すぐに取り組んだということ、日本文化史上、きわめて注目値することと言わねばならない。

それにしても、本書に集録したもののほとんど大部分の資料は、外国文献の日本語への翻訳文であるからして、翻訳されている思想そのものは、もともと日本人が生み出したものではなく、欧米人の思想にほかならない。従って本書を、「日本思想の系譜——文献資料集」（全五冊）という日本の古代から近代に及ぶ思想文献を集録した書物に対して、その「外編」というのは、当を得ていないのではないか、という反問もできるかも知れない。たしかに、そう言えばその通りであるが、ここでは、これらの邦訳文における「訳し方」の問題に重点をおき、邦訳という作業の中に、日本思想そのものが、具体的に発露している姿を捉えようとしたのである。

顧れば、日本に外国文化が移入されたのは、遠く千数百年前の、仏教・儒教その他のアジア大陸文化との本格的な接触にはじまるが、どちらかと言えば、同文同種の言語ともいべき漢民族の文化、または、漢民族を経由して日本に紹介された仏教文化は、ともに日本人に取って、その言語の性格から言っても、比較的に接し易い文化であったと言えよう。

これに比して、明治維新前後に始まる、西洋文化の日本への本格的な移入においては、

- ① 風俗・習慣の面での大変な相異があること

- ② 言語の性格に大変な相異があること

という二つの面を考えてみただけでも、これは容易ならざる難作業であったにちがいない。しかも、一口に西洋文化と言っても、近世の西欧で、海外発展の先驅をなした蘭・西両国のオランダ語・スペイン語にはじまって、本格的な西洋文化を構成する英語・ドイツ語・フランス語の三外国語の文献を、一時に翻譯し出す、ということであったから、これに取り組んだ人びとの努力は、並みだいていものではなかったと思われる。

一概に外国語といっても、衣・食・住に関する最少限度の外国語は、それでも比較的

容易に理解し得たり、使い馴れるということができよう。しかし、人生観ことに、宗教・芸術・文学・哲学などに関する思想の分野になると、それらの外国語を理解することは、一つ一つの単語の訳出や一つ一つのセンテンスの理解のほかに、文章を全体的に理解する思想力というものが、こちら側の人間の心の中に、前もって内在していないと、決して果たせるものではない。このことに気がつけば、よく世間でいうような、あの人は外国語に堪能であるとか、あの人は外国語を駆使できるとか、ということも、必ずしも、それだけで、その人々が外国人の思想を正しく理解できる人というわけにはならない。すなわち、単に外国語に精通しているということと、外国人の思想を理解しうる能力を持っているかどうかということとは、常に必らずしも一致するものではないからである。

それゆえに、欧米文献の翻訳という思想的な作業においては、まずそれに従事しようとするこちら側が、日本人としてどれほどの素養を持っていて外国語に相対しているのか、また、日本人として情操的にも思想的にも、申し分のない日本人らしさを身につけてそれに従事しているかどうか、その点こそが、一番大事なことになってくる。

本書の各章における解説の中にも、それに関連することが随所に指摘されているが、フイヒテの「独逸国民に告ぐ」を完訳された大津康氏が、「国語の生命のわからないものには、外国語はわからない」と言っておられたことが紹介されている（第三十四章四五八ページ参照）。これなども、大津氏の言葉が強烈でありはするが、急所を衝いているように思われてならない。

本書に取り上げた三十九編の翻訳者たちの大部分は、僭越な言い方かも知れないが、この点において、現代日本人の翻訳者たちの、及びもつかぬような総合的な日本精神を、また、愛国のスピリットを、その身のうちに、その心のなかに、ひそませていたように見うけられる。ということは、本書に取り上げたような邦訳文、生き生きとし、かつ、簡潔な訳語と魂の籠ったような文章をもって、外国思想文献の邦訳としたというそのことの中に、「日本思想の系譜」ともいうべきものが、脈々として表白せられている、と読みとれたからである。このことが、外国文献翻訳文の集録である本書を、あえて、既刊の「日本思想の系譜―文献資料集」（全五冊）の「外編」と銘打った理由でもあった。

試みに、本書のあちこちを見開いてごらんください。きっと、訳者の文章に、血湧き

血躍るのさまをお感じになられることと思う。また、時に、訳者の人生観と原典の著者（外国人）の人生観とが、火花を散らせて相接しているように思われる所に、目がお止まりになることであろうし、また、両者の心弦相鳴というか、訳者と原著者とが、双肩を抱き合って感激にむせび合うかのごとき場面にも、出会われることと思う。とにかく、邦訳文の文章のなかに日本語が生きている、と思う。あるいはまた、日本の心で外国人の思想・情操をとらえ、それを再び日本の心に摂取した上で日本語が綴られている、と言ってもよからう。そのような感じが、行間から充満してこぼれてくるように感ぜられるのである。本書の編集には、哲学・宗教・政治・経済・文芸の万般にわたって取り上げたが、とくに文芸物・詩歌などの邦訳には、こうした印象を強く受けたものである。しかし、これもあながち、私たちだけの印象ではなかったらうと思う。いずれにしても、すばらしい先人たちを持ったわれわれの幸福を、しみじみと嬉しく思いながら、本書が編集されていたことを、お伝えしておきたいと思う。

本書の編集においては、資料収集の点でかなりの困難を伴った作業であったために、

あるいは不行届きの点なども出ていることと思う。御指摘によって更により良きものに整えることができれば、うれしいことである。また、紙数の関係で本書に採択できなかったものが、約七十編もあったことを考え合わせ、他日それらが編集される日のあらんことを祈りたいと思う。

また、本書への引用資料には、多く国会図書館の蔵書の中から写させていただいたが、それを含めて多くの既刊複製本から活用させていただいたことをつけ加えたい。書中その都度、出典を記したのは、謝意を含めてのことである。また、さきに御紹介した編集委員の諸氏をはじめ、先輩・畏友に一方ならぬご鞭撻お力添えを賜わったことを心から感謝し、厚く御礼を申し上げたいと思う。

なお本書の巻末に、さきに刊行した「日本思想の系譜―文献資料集」（全五冊）の総目次を添えたのは、読者各位の御便宜を考えてのことと、編集委員全員の要望によって、本書を手になされた方々が、再び、日本古来からの日本思想の文献資料の上に、回想の心を馳せられることを祈ってのことである。本書と共に座右に備へられ、先人の志を学ぶ

よすがにしていただければ、私どもの喜びこれに過ぐるものはなく、とくに、青年・学生層のあいだに、これらの書物がお役に立つ日のあらんことを祈るものである。

昭和四十五年三月一日

編 者

凡 例

一、採り上げた文献資料は、同じ原著について数多い翻訳の中で、一番はじめに出されたものに焦点をしぼり、しかも、その初版に取り組むように努力した。

一、配列の順序は、邦訳文の出来た時期をもって、年代順に並べることを原則としたが、かなり例外もでた。

一、この時代の文章は、句読点が非常に少ないもの、中には、ほとんどないものなどもあるので、読み易くするために適宜、担当委員によって加えられたものが少なくない。しかし、文芸作品の一部については、原文のニュアンスを損じないようにするため、なるべく原文のままにするようにしたものが多い。

一、漢字の字体は、主として当用漢字を用いたが、表題および本文のある部分については、字体から受ける感覚を考えて、一部原著のままに旧字体を使ったものもある。

一、仮名づかいは、文献資料そのものは、原文通り歴史的仮名づかいのままとし、解説文その他は、おおむね現代仮名づかいによった。

一、振り仮名の仮名づかいは、一部の文献資料については、歴史的仮名づかいにより、その他は、現代仮名づかいによった。

一、各章の冒頭の解説および採用文献に附随した解説には、その末尾に、その執筆と選択とをお願いした編集委員の名前を（ ）に註記した。なお、（ ）のないものは、編者が記したものである。

一、表紙の右半分に載せた絵は、本書の題名にちなんで歐洲のものを選び、フランスの寒村風景の絵を載せた。

一、各章の表題に、書物の題名のほかに、原著者と邦訳者の双方の名前を載せたが、原著者が、多数者であるもの、邦訳者が手分けして訳しているものについては、例外的な表題となっている。

一、顔写真については、できる限りの努力をして集めにかかったが、遂に入手できないものがあったことは残念であった。なお、同一人で二ヶ所に登場する人については、はじめに登場する場所にこれを挿入し、あとは省略して重複を避けることにした。

明治時代の翻訳について

——各章の「解説」から抜き書きしながら——

本書に採り上げた邦訳者たちが、はじめて取り組む西欧文献について、さまざまな苦心をされた心境は、各章ごとに、それぞれ担当の編集委員によって、「解説」の中に記されているが、全体的にそれらからいくつかの点を取り上げて、ここにご紹介しておきたいと思う。

一、日本語と全く勝手が違う外国語と取り組んで、一番困られた問題は、外国語の辞書にも載っていないような、外国人としては、ごく初歩的の文字で、誰れでも、それを知らない人はいない、というごくありふれた単語であった、ということ。このことは、福沢諭吉が、

「江戸に來りて英書を読むことに志し、特に教師とてもなく専ら蘭英対訳の辞書を相手に、辛苦二三年にして略英文をも解することに為りしかども、蘭書なり英書なり之を読むは唯文法を本にし辞書に訴ふるのみにして、其外に便る可きものなきが故に、彼国普通の語にして誰れにも知れ渡り殆ど辞書に註解するほどの必要なきものは、正しく吾々日本人の最も解釈に苦しむ

文字にして、一文字の不審なるが為めに、全文の始末に当惑したるは毎々のことなり。」

と述懐しているのをみても、「彼の国の普通の言葉」の意味がわからないで困ったことがよくうかがわれる。福沢諭吉に限らず、多くの先人たちの共通した苦勞の一コマであったことであろう。

二、一つ一つの単語に、どういう日本語を当てればよいかは、翻訳作業において常につきまとう問題であるが、初期の作業ともなれば、その苦勞もひとときわであったと思う。同じ福沢諭吉が、スチームという英語が従来「蒸氣」と訳されていたのに対して、日本の漢字で、一字だけで、スチームの意をあらわす字はないかと思い、自分の持っている『康熙字典』を持ち出して、「無暗に火扁水扁などの部を搜索する中に、「汽」と云う字を見て、其註に水の氣なりとあり、是れは面白しと独り首肯して始めて「汽」の字を用ひたり」と書いているし、また福沢は、コピーライトという字の適訳を考えあぐねて、結局「コピーライトを直訳して「版權」という新文字を製造したり。」などと回想している。

ブルンチュリ(スイス人、ドイツ語)の「国法汎論」を訳した加藤弘之も、洋書翻訳の苦衷を記して、「凡^{オモ}ソ江湖読書ノ徒、訳書ノ拙文ヲ尤^{トガ}ムル者少カラズ。蓋^{ケダ}シ訳業ノ難^{カタ}キヲ察セザルニ由^ヨルナリ。夫^ソレ殊方異域ノ言語文章、我ト其脈理ヲ同^{オナジ}ウセザル、恐クハ漢・梵^{ボン}ノ比ニアラザルベシ。況^{イハ}ヤ、

其説^{ソント}ク処、概略学科術芸ニ係^カルヲ以テヤ、紀事・史乗トハ、其難易亦自ラ異ルヲヤ、……」
と歎いているが、この点もまた、他の訳者たちに共通した思いであつたことであらう。

三、次に載せた本書の目次に見る書名の訳語にしても、また、欧米独特の思想的用語の訳語の中にも、今日の私たちに、「なるほど」と思わせるような「訳し方」が見出されてくる。

例へば、ジョン・ステュアート・ミルの Utilitarianism という書名は、今日では、「功利主義論」と訳するのが普通になっているが、この訳者西周は、明治十年にこれを「利学」と訳している。「利」という言葉は、東洋の言葉であり、「功利」という表現は、西欧的用語の嫌が多いのではないか。日本人の思想に立つての外国思想のとらえ方から見れば、あるいは西の訳の「利学」の方が、「功利主義論」という表現よりも、なにかしら日本人に判りやすいセンスであるかも知れない。

また、この西は、右の訳文に、自分の序文を書いているが、その中で、「哲学」という文字について、大変味わい深い所見を述べている。すなわち、フィロソフィーという言葉について

「本訳中ニ称スル所ノ哲学ハ、即チ歐洲儒学也。今、哲学ト訳ス、以テ之ヲ東方儒学ニ別ツ所也。」